在米日本人留学生による滞米中のソーシャルスキル使用
—留学前ソーシャルスキル学習の受講者と非受講者の場合—

○髙濵　愛（静岡大学国際交流センター）・田中　共子（岡山大学社会文化科学研究科）

【はじめに】　日本人留学者の半数以上が米国に留学している現在、彼らの米国という異文化への適応を実証的に把握し、教育的課題を読み解き、対応する教育策を案出していくことは、留学生教育の重要なテーマの一つと考えられる。Takahama, Nishimura and Tanaka（2008）では、在米日本人留学生にとって、留学先である米国の文化・社会に適したソーシャルスキルを使用することが、彼らの異文化適応に肯定的な影響をもたらす可能性が高いと指摘されている。この効果を積極的に求めるため、先に我々は、米国留学を数ヶ月後に控えた日本人学生を対象に、アメリカン・ソーシャルスキルを学ぶセッションの提供を試みた（田中・髙濵,印刷中）。本研究では、セッションでソーシャルスキルが身に付いて留学先で発揮されたか、それは適応に有用かという問いへの手がかりを得ようと考えた。そこでセッションに参加した学生と参加しなかった学生を対象に、米国留学中のソーシャルスキルの使用について調べてみた。

【方法】　1．調査手続き　2007年11月から12月、アメリカ留学中の日本人留学生10名を現地に訪ね、質問紙調査と各1時間程度の非構造化面接を実施。スキルについては、セッションで学習対象とした8スキル（スキル1・笑顔、アイコンタクト、聞く態度）、スキル2・初対面の相手に挨拶する、スキル3・友人を作る、スキル4・先生に質問する／相談に行く、スキル5・授業で自分の意見を言う、スキル6・先生に要求を伝える、スキル7・主張／交渉する、スキル8・依頼された援助を断る）の実施の有無やその状況などを自由記述してもらい、面接ではスキル使用のエピソードとホストとの交流、留学生活について聞いた。スキルの内容、頻度、文脈、反応、感触などは、特に詳しく聞いた。語りは許可を得て録音した。面接者は本稿の第一筆者。

2．調査対象者　20代前半の在米日本人留学生10名（男性3名、女性7名）。日本では全員、学部所属の学生で、短期交換留学プログラムを利用して留学。このため当該大学での留学に十分な英語力の持ち主と考えられる。彼らは滞在期間とスキル学習方法の組み合わせから、3群に分けられる。①S 群－滞在初期・スキル人為的学習群3名（S2、S3、S6）：2007年6月から7月、アメリカ留学前に我々のソーシャルスキル学習セッションに参加し、8つのスキルを学んでから渡米。調査時点で留学後3ヶ月から4ヶ月程度経過。② N群－滞在中期・スキル自然学習群3名（N1、N2、N3）：S群と同大学出身だが、留学出発時期が数ヶ月早く、学習セッションには参加していない。渡航後半年から7ヶ月ほど経過。いわばソーシャルスキルを自力で自然学習したグループ。③U 群－滞在初期・スキル自然学習群4名（U1、U2、U4、U5）：S群やN群とは異なる大学の出身者で、調査時点で留学後3ヶ月から4ヶ月程度経過。学習セッションの参加の機会はなく、やはり自然学習者とみなせる。住環境としては、N1は学外に居住、他は大学の寮で生活していた。U4とU5は過去に1年以上の米国滞在経験を持っていた。なお上記以外にも、回答や条件の揃わなかった4名の調査協力者がいたが、その情報は今回の分析対象としていない。

3．分析方法　質問紙からスキルの使用状況を集計した。次に以下の観点から語りを比較していった。①S 群とU 群：共に滞在初期だが、セッション受講を経たS群の

方が、スキルを使っているか。②S群とN群：セッションを受講した滞在初期のS群は、同大学出身で滞在がすでに中期のN群と、スキル実施度合いで差があるか。③N群とU群：滞在初期と中期で、スキルの自然学習に時期的な差がみられるか。

【結果と考察】 質問紙の回答を集計すると、滞在初期のS群、U群では、スキル1～4の比較的易しいスキルは使っていたが、スキル5～8の難易度の高いスキルは使っていなかった。滞在中期のN群では、スキル1～4の他、スキル5～6のエピソードもあった。すなわち初期にはスキル1～4、中期にはスキル5～6が自然学習されやすい。使用開始時期の観点で見た場合は、人為的学習の効果は明らかでない。

語りをたどると、S群のスキル使用の概略は以下の通り。セッションで学習したスキル、特に「スキル3：友人を作る」を積極的に使用していた。セッションでスキル発揮の「ポイント」として習った、「他の人を観察する」「能動的に周囲の人に働きかける」という対応の実践に努めていた。認知的・行動的に、積極的にスキルを使おうと心がけていた。「(留学で学んだのは) 友達の大切さ」(S6) など、交流を楽しむ語りが多かった。彼らはセッションへの参加は、「意義があり、役立った」と語った。

N群とU群でも、スキル発揮や留学生活を楽しむ語りはあるが、困難の程度や期間、解決方略は、S群と微妙に異なる。第一に、新たな関係へと働きかけるS群に比べて、N群やU群では、自然発生的な援助資源に不自由しがちのようである。U群では、困ったときは現地の人ではなく、日本の家族や日本の同じ大学から来た日本人に相談する学生 (U2、U4、U5) が多い (75%)。U5は、ルームメイトとのトラブルを相談できずに困っていた。N1は、悩んで大学のカウンセリングに通った。二つめは、S群の授業への関与がより積極的なことである。N2、U1は、授業中に手を上げて発言するには至っていないと述べている。S群でもできてはいないが、少なくとも発言しようと意欲的 (S2・S3) だったり、代わりに後で先生を訪問して質問したりする (S6)。三つめに、同じように困難を経験しても、S群では問題解決の見通しや心構えがあることを感じさせる語りがある。渡米後初期の数ヶ月は、帰りたいと思ったり (N3)、悩んだりして (S2)、大変つらかったとする語りは、全群に見られる。その後、問題解決は「自分次第」(S2)、「解決に向けて自分から動く」(N2) などと考えて、次第に克服していく点も共通する。文化適応の過程を辿っているものと解釈される。だがN3は慣れるのに半年と、短期留学期間の半分以上を費やしたという。海外滞在経験を持つU4、U5も、対人関係の構築はなかなかだったという。ところがS群は、解決に窮する語りが少ない。セッションでは、予想される適応上の困難を解決に導く捉え方 (認知的スキル) ややり方 (行動的スキル) を習う。セッション直後にも、不安の低減や自信の向上が報告される (田中ら、印刷中)。適応への自己効力感の向上や、サポート獲得の可能性の高まりには、ソーシャルスキル教育の心理教育的な効果が指摘できる。

参考文献 田中共子・高濱愛「米国留学準備のためのアメリカン・ソーシャル・スキル学習：大学での学習場面への対応を課題とした中級セッションの記録」『岡山大学文学部紀要』(印刷中)／Takahama, A., Nishimura, Y. & Tanaka, T. (2008). The influence of social skills to get social support on adolescents during study abroad: A case study on Japanese short-term exchange students. *Journal of International Student Advisors and Educators*.10 pp. 69-84.

註 本研究は、科学研究費補助金 (萌芽研究 19653099 代表・高浜愛) を受けた。